2009 年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果

宮重徹也*

Objectives and Effects of Miyashige Seminar Camp in 2009

MIYASHIGE Tetsuya*

This paper is Camp Report of Miyashige Seminar in 2009. Students joining my seminar had a debrief session about their study and they visited to Link and Motivation Inc..

キーワード　ゼミ合宿、卒業研究報告会、企業訪問、リンクアンドモチベーション

1．はじめに

筆者は経営戦略や企業倫理（CSR）を専門分野とする研究者であるため、富山商船高等専門学校国際流通学科における筆者の卒業研究ゼミナールでは、学生たちは経営戦略や企業倫理（CSR）に関連するテーマの卒業研究に取り組むことになる。

経営戦略は競争力を持つ企業の特徴を明らかにしようとするものであるが、現在の主要な理論研究では、その競争力の源泉を企業内部に求める理論が主流である。例えば、ジェイ・バーニー（Jay B. Barney）は競争力の源泉を企業内部の希少かつ模倣困難な「リソース（resource）」や「ケイパビリティ（capability）」に求めるリソース・ベースド・ビュー（Resource Based View）を提唱しており(1)、ゲイリー・ハメル（Gary Hamel）とプラハラード（C. K. Prahalad）は競争力の源泉を企業内部の「コア・コンピタンス（core competence）」に求めるコア・コンピタンス経営を提唱している(2)。また、野中郁次郎と竹内弘高は競争力の源泉を企業内部で新たな知識が創られる「知識創造」に求めており(3)、ピーター・ドラッカー（Peter F. Drucker）は知識という第一義的な資源を担う企業内部の「知識労働者」に求めている(4)。筆者自身もこのような理論研究に基づいて、医薬品企業の競争力の源泉を企業内部の「倫理的企業文化」に求めた実証研究をまとめている(5)(6)。

筆者のゼミナール（宮重ゼミナール）では、このような理論研究に基づいて、現実に即した論理の明快な卒業論文の作成を目標としているが、学生たちは企業内部に直接触れる機会が少なく、企業内部の暗黙知を理解できない状況にある。

そこで、宮重ゼミナールでは、このような企業内部の暗黙知を修得することを目的として、2004 年度から卒業研究報告会と企業訪問を含むゼミ合宿を実施することにした(7)(8)(9)(10)(11)(12)。

本稿では 2009 年度のゼミ合宿の目的と効果について報告を行う。2009 年度における卒業研究報告会と企業訪問の目的は、それぞれ次の通りである。

卒業研究報告会の目的は、論理の明快な卒業論文を作成するために、提出期限までの時間に余裕のあるこの時期に、卒業研究の論理の明快でない箇所を見直すことにある。従って、この報告会では報告学生は自分の卒業研究を論理的に説明し、報告を受ける学生は論理の明快でない箇所や不完全な箇所を指摘することが求められる。これらの作業を通して、各自の卒業研究の論理が明快となるように見直していく。

企業訪問の目的は、次の2点である。第1に、企業を訪問して、企業内部の状況を肌で感じることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知を修得することである。換言すれば、この企業訪問の経験から、これまでの形式知を教授する文献や講義だけでは修得できなかった暗黙知を修得することを目的とし

* 専攻科専任（国際ビジネス学専攻）
e-mail: miyasige@nc-toyama.ac.jp

　（平成22年４月26日受付）

ている。第2に、学生は将来、企業などの組織へと就職することになるため、卒業研究という観点からのみではなく、働く場所という観点からも企業を理解することである。

本稿では、2009 年度卒業研究ゼミ合宿の事例から、学生たちのレポートに基づいて、このような目的の効果が得られたことを検証していく。

2. 2009 年度卒業研究ゼミ合宿の概要

本章ではゼミ合宿の概要をまとめておく。2009 年度ゼミ合宿は 7 月 26 日から 28 日までの 2 泊 3 日で、5 年生のゼミ生 6 名の参加のもとに実施した。

夏休み期間中ということもあり、1 日目は避暑地である妙高高原へと移動して、その妙高高原において、企業調査報告会を実施した。2 日目は朝に東京へと移動し、株式会社リンクアンドモチベーション本社を企業訪問させて頂いた。その後、東京にて卒業研究報告会を実施して、3 日目の朝に解散した（表2－1参照）。

表2－1　2009 年度ゼミ合宿の日程表

○7月26日（日）
富山 11:16―JR 北陸本線・特急北越 3 号―12:30 直江津 13:11―JR 信越本線・普通妙高 6 号―14:03 妙高高原
企業調査報告会（14:30～19:00、21:00～23:00）
○7月27日（月）
妙高高原 9:12―JR 信越本線・普通―9:52 長野 10:08―JR 長野新幹線・あさま 518 号―11:31 東京―JR 山手線―有楽町
13:00～15:30　株式会社リンクアンドモチベーション本社　訪問
卒業研究報告会（16:45～20:00）
○7月28日（火）
解散

3. 卒業研究報告会の目的と効果

本章では、学生たちから提出されたレポートに基づいて、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたことを検証していく。

宮重ゼミナールでは、4 年後期の流通ゼミナール（プレ卒業研究）から、卒業研究の論理性について学習を進めているが、5年生の夏休みの時点では、卒業研究の論理性が未だ不明確な学生が多数である。

そこで、卒業研究報告会の目的は、論理の明快な卒業論文を作成するために、提出期限までに時間的な余裕のあるこの時期に、卒業研究の論理の明快でない箇所や不完全な箇所を見直すことにある。従って、この報告会では、報告学生は自分の卒業研究を論理的に説明し、報告を受ける学生は論理的に明快でない箇所や論理の不完全な箇所を指摘することが求められる。これらの作業を通して、論理の明確な卒業論文が作成できるように見直していく。6 名の 5 年生の卒業研究報告会のタイトルは表3－1の通りである（写真3－1，写真3－2参照）。

表3－1　卒業研究報告会の報告内容

報告時間	報告者氏名	報告タイトル
16:45～17:25	棚田祥太	不祥事を起こす企業体質-CSR活動に着目して-
17:25～18:00	竹内敦美	寡占市場における新規参入成功の条件
18:00～18:30	西尾七恵	企業の雇用活動-不況期に採用を増やす企業は成長するのか-
18:30～19:00	長澤優花	非上場企業が CSR で築く優位性-上場企業との比較において-
19:05～19:40	南佳苗	企業不祥事により損失を招いた企業と、経営を維持した企業の差異-企業倫理の観点から-
19:40～20:00	坂谷理紗子	男性の育児休暇における業績の変化

写真3－1　卒業研究報告会の風景(1)

写真3－2　卒業研究報告会の風景(2)

次に、学生たちから提出されたレポートに基づいて、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたことを検証していく。

国際流通学科 5 年　坂谷理紗子

今回の、卒業研究報告会はいつもと違った環境下で1人1人発表を行った。論文構成に関しては教官に指導していただきすっきりまとめることができたが、相手に説明するという点においてはまだまだ甘いように思えた。自分では当然分かっていると思っていた用語も相手に説明するとなると、うまく説明することができず、結局自分の中でその用語が曖昧に処理されていることを改めて痛感した。他の人に質問や指摘をしてもらうことで自分の論文内容を再度確認することができた。

私は「男性の育児休暇における業績の変化」というテーマで研究を進めているが、今後の課題としてワークライフバランスの定義と概要をより深く調査すること、事例検証により業績の比較を明らかにすることである。

自分だけで論文を進めていこうとすると、どうしても自分の主観が入ってしまう可能性がある。そうならないためにもその都度、教官や他のゼミ生に自分の論文を読んでもらい、違った視点からの意見も大いに参考にしたいと思った。今後の執筆がスムーズに行えるように努力したい。

国際流通学科5年　竹内敦美

私は卒業研究報告会に参加するにあたって、十分な準備ができていたわけではなかった。というのも、レジュメをもとに自問自答しても的確に答えられないこと、今までに調査したことは表面上だけで、中身が伴わないものであったことに気づいたからである。さらに、私の前の報告者であった棚田君は、まるですべてを知り尽くしているかのように語るので、自分の報告の不十分さに不安が募った。

報告では現段階で分かっていることはすべて話した。不安で仕方がなかったが、周りのみんながうなずいてくれることで、少しの安心感が生まれてきた。

ディスカッションでは、ゼミ生がたくさんの質問を投げかけてくれた。私の研究の内容について詳しく知っているわけではないが、懸命に考え、質問してくれたことがうれしかった。

今回の報告会では、研究するのは一人だが、深めるには仲間の存在がとても大切であることに気づいた。どんなに不安でも、相づちしながら聞いてくれる仲間がいる。路頭に迷いそうになっても道を正してくれる仲間がいるので、私の研究はより高いゴールへと進むことができるのである。

教官は、ストーリーが通っていればよいとおっしゃったが、1 年半かけて作り上げるものなのだから、聴衆を楽しませるものに仕上げたい。

国際流通学科5年　棚田祥太

今回の卒業研究報告会における目標は、論文としてのストーリーを完成し全員をうなずかせるとであった。

これまで、結論として「企業は真の CSR を追求すべきである」と主張したいことは明確であるものの、なぜそう言えるのかがクリアにならず、情報だけが蓄積されていた状態だった。しかし、合宿前最後のゼミで助言頂いたように、いくつかある事例を並べて共通点はないか、これらの事象を説明付けられるストーリーはないかを再度考え直してみた。今回の発表は先生をはじめゼミ生全体の反応が良かったような気がした。（表情から察するに）

今回の報告会ではそれまでの背景をふまえて、論文構成を組み立ててきたことで、ストーリーが首尾一貫しているか、目的から結論までが明確に繋がっているか、第三者の目を通す意義のあるディスカッションであった。週1のゼミでは互いに進捗状況を報告するにしかすぎず、調べてきた情報を共有する程度であった。従って、研究そのものを深くつく議論は少なかったように思う。もちろん、まだ論文の枠組みができていない段階であるからそれは妥当であったが、今回は初めて客観的な意見が必要とされた場面であった。

他のゼミ生の発表を聞きながら、納得することもあれば、矛盾点ばかり気になることもしばしばあった。質問をすれば一時的に解決するのだが、再び論文全体の中でみると話が合わないのである。リサーチクエスチョンに共感でき、主張したいことも納得できるのだが、今一つ理解した感覚が得られないのは、目的から結論までのプロセスが繋がっていないからなのだろう。なぜそう言えるのかが分からなければ、結局は何を言っているのか分からなくなってしまうのである。振り返ると、これまでの定例ゼミでは、おそらく全員がこのような思いで私の報告を聞いていたに違いない。ようやくそのことを実感できた。

ある目的を達成するために必要な情報を集めて概念化し結論を導き出すことが、論文を書く上でいかに重要であるかを学んだ。その基本は仕上がったが、今後執筆作業に取り掛かるうえで、その工程から外れぬように十分留意したい。

国際流通学科5年　長澤優花

全員の発表を聞いて、春から具体的に焦点をあてていった研究が、さらに具体的になっていて素直にうれしかった。また、全員枠組みができたことも安心した。

しかし私は、自分で考えているとわかったつもりでも、何気ない質問にどう答えればよいかわからなかったことや、論点がずれることがあったので、今回できた枠組みを忘れず、今後は随時時間を見つけて、論文に取り組んでいきたい。

特に、どういった先行研究をみなければならないのか分かったので、論文を書く作業だけでなく、こういったことも平行して行っていく予定である。

毎回のゼミでも、全員が発表して質問していたので、各ゼミ生のレジュメと自分のレジュメを比べて足りないところを見つけたり、派生して考えを見つけたりすることがあったが、今回の報告会では、全員の構成を見ながら議論できたので、自分の論文と照らし合わせたときに、いつもより考えを深めながら、議論できたように思う。

まだまだ長期戦であるが、おそらくあっという間に終わってしまうだろうから、自分のスケジュールを管理し、ペースを考えて、納得のできる論文ができるように全力を尽くしたい。

国際流通学科5年　西尾七恵

このゼミ合宿での卒研のディスカッションで、自分の卒研内容について考え直すことができた。ほかのゼミメンバーと比べると進行具合が遅いことや、内容もこのままでは進めないかもしれないな、という思いを自分の中でも抱えていた。しかし、今回の合宿中のディスカッションで、みんなからも意見をもらい、枠組も決めることができた。おそらく私一人では行き詰ったままであっただろうから、こうしてみんなから意見をもらい、しっかりとした枠組みを決めることができる機会があることはとても助かった。今後は、みんなから言ってもらった意見やアドバイスを参考に、卒研を書いていきたいと思う。

また、このゼミ合宿中には、それぞれのモチベーションが何によって変化されているかということなど、企業訪問によって感じたこと、得られたことを話し合い、共有することができた。この活動で、普段は気にしていな

いような自分のなかにある価値観に気づき、自分が持っていない考え方を知ることができた。こういったことは、学校で会うだけでは話せないし、知ることができないものだったから、狭くなりがちな自分の視野を広げる良い機会にもなったように感じる。この合宿で得られたものは言葉で表せないほど多く、とても参考になった。もうなかなかこういった機会は無いと思うので、今回の経験を大切にしていきたい。

国際流通学科5年　南　佳苗

今回の合宿で一番ためになったのは、『誰かと本気で語り合う』ということが出来た点だ。以前の定量的でしか人を計ることの出来なかった私なら、相手がどのようなことを考えているのか全くどうでもいいことであったに違いない。

しかし、挫折し、人の痛みが分かるようになって、初めて人の意見に耳を貸すということの意味が分かった。語ることは、もちろんビジョンがないと出来ないことだけれど、話を聞くということは自分のビジョンをもっと高めようという意識がないと出来ないことだと思った。

それと同時に感じたことは、仲間の大切さだ。卒業研究の枠組みを決めるときも、皆が親身になってくれた。自分の卒業研究の切り口は不自然であった。それを皆が真剣に一緒に考えてくれたことが嬉しかった。他人事ではなく、皆で作り上げていくのだという意識を自分も持ちたいと思う。しかし、論理構成を自分自身の力で全て考えたかったということも確かだ。皆と共に考えることで、自分の未熟さを痛感したからだ。しかし、どんなときだって『完璧な自分』というのはあり得ないから、完璧な自分に一歩でも近づくためにも人と協力し、努力していきたいと思った。

これらのレポートから、5年生のゼミ生 6 名各々が、各自の卒業研究の論理の明快でない箇所や不完全な箇所に気付いたことが示され、卒業研究報告会の目的とする効果が得られたことが検証された。

4. 株式会社リンクアンドモチベーション本社への企業訪問の目的と効果

本章では株式会社リンクアンドモチベーション本社への企業訪問の概要と目的を述べた後、学生たちから提出されたレポートに基づいて、企業訪問の目的とする効果が得られたことを検証していく。

宮重ゼミナールでは、ゼミ合宿 2 日目の 2009 年 7 月 27 日（月）13:00～15:30 の 2 時間 30 分にわたって、株式会社リンクアンドモチベーション本社を企業訪問させて頂いた（表4－1，写真4－1，写真4－2参照）。

リンクアンドモチベーションへの企業訪問の目的は、次の2点である。第1に、企業を訪問して、企業内部の状況を肌で感じることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知を修得することである。第2に、学生は将来、企業などの組織へと就職することになるため、卒業研究という観点からのみではなく、働く場所という観点からも企業を理解することである。

表4－1　株式会社リンクアンドモチベーション本社訪問の内容

自己紹介（エントリーマネジメントカンパニー　マネジャー　染谷剛史様）
学生によるワークシートの作成と発表（アドバイザー：染谷剛史様、星野大地様）
ワークシートに基づく講演（エントリーマネジメントカンパニー　星野大地様）
質疑応答（染谷剛史様、星野大地様）

写真4－1　株式会社リンクアンドモチベーション本社への企業訪問風景（1）

写真4－2　株式会社リンクアンドモチベーション本社への企業訪問風景（2）

次に、リンクアンドモチベーションに企業訪問させて頂いた学生たちのレポートに基づいて、リンクアンドモチベーションへの企業訪問の目的とする効果が得られたことを検証していく。

国際流通学科５年　坂谷理紗子

株式会社リンクアンドモチベーション（以下、リンクアンドモチベーション）の総合ロビーに入った第一印象は、おしゃれだなと思った。ロビーには代表取締役の小笹氏の著書や心理学や組織論の本が飾ってある。また、応接室や会議室にはそれぞれ「Darwin（ダーウィン）」、「Kennedy（ケネディー）」など名前が付いており、それぞれに意味を持っている。この企業のメッセージがオフィスから伝わってきた。

会議室に入りまず、自分の過去をモチベーションの観点から振り返るためにグラフを作成し発表した。その後、今回お話を伺ったエントリーマネジメント事業部の染谷さんと星野さんから個人と組織間のビジョンを高めていくにはモチベーションを維持し高めていくことが大切であるとご説明いただいた。「できる、できない」ではなく「やるかやらないか」であり、やらない後悔よりも、やった方のリスクの負う方が断然面白くやりがいも感じるとおっしゃっていた。確かにどんな物事も、やって失敗した後悔と、やらないで後悔するのとでは自分の経験にも大きな差が生まれるだけでなく今後のモチベーションにも大きく影響するのだと感じた。失敗こそが最高のチャンスなのだとチーム全員が思うことができれば、どんな困難にも立ち向かうことができるのだということを、考えさせられた。また、大切なことは組織間でゴールを共有し、どんな小さな約束も守ることであると染谷さんは私たちにメッセージとして伝えていただいたがこれは私たちの普段の生活にも言えると思う。

リンクアンドモチベーションで働く人々のビジョンは、決してお金でも名誉でもなく自分たちが「日本を元気にしたい」という高い理想が源泉となっている。自分達の事業を通して組織が、社会は変わることができると社員全員が本気で思っているのだなと染谷さん、星野さんのお話を通して感じ取ることができた。社員全員が未来のビジョンを共有しているからこそ仕事に対して熱く本気になれるのであり、だからこそ仕事が楽しいと思えるのかもしれない。

今回の話を伺って自分が働くという立場に立った時、将来ビジョンを組織間で共有しあうことができたら仕事も人生も面白くなるのだろうなと思えた。この訪問で今後の自分の人生について真剣に向き合う良い機会を得た。

国際流通学科5年　竹内敦美

リンクアンドモチベーションを訪問して、まず初めに思い浮かんだのは「素敵」という言葉だった。赤をメインカラーとした温かみのある雰囲気の中に、アクセントとして青のクッションがおかれていたり、会議室はそれぞれの部屋に名前とコンセプトがあったりと、細部までお洒落に気を配っていた。

次に、染谷さん、星野さんの話を伺って印象に残っているのは「自分を伸ばすための練習だから、どんなに帰りが遅くなっても構わない。」という言葉である。なぜ体を酷使してまで仕事をするのか。なぜ休みを取らずに仕事をし続けるのか。これらの私の疑問は一瞬で答えが見つかった。仕事とは、私で言うところの部活動と同じなのだ。上手になりたいから一人残って自主練習をする。成果をあげたいから、そのためなら時間も努力も惜しまないのである。これをしたからといって誰かから評価されるわけではないが、自分のやりたいこと

をとことん追求しているのだから満足なのである。きっと、染谷さんも星野さんも同じ思いなのではないだろうか。

そしてもう 1 つ印象に残っている言葉は「逃げるな」という言葉である。この言葉は今の私にとってとても重かった。明確な夢はあるが、それに向かうための道は険しく、思うように成果が上がらなかったからである。しかし、「1勝9敗でいいからあきらめずにがんばり続けることが大切」と言われ、白星をあげていない自分はあきらめてはいけないと強く思った。

リンクアンドモチベーションで貴重なお話を伺えたことは、私の人生のターニングポイントになったと思う。今後控えている受験は1勝9敗というわけにはいかないが、それまでの過程で自分に負けてしまわぬよう今後の生活を引き締めていきたい。

国際流通学科5年　棚田祥太

染谷さんと星野さんのお二人に共通して言えることは、過去の経験が今日の職に強く結び付いている点である。それは、大学で経営や経済学を学んだとかいった経歴ではなく、求人情報誌の企画や大学でのサークル活動などの経験である。そこから、○○になりたいという理想ではなく、日本で働くサラリーマンを更には日本全体を元気にしたい、という使命感を抱かれている。これこそが正にモチベーションの姿であり、リンクアンドモチベーションのビジネスパーソンなのだと感じた。私たちにモチベーション曲線を描き過去を振り返らせ、将来どうしたいかを問うたのはそういった意味合いがあったのだろう。

前日の企業調査報告会では、モチベーション向上のための様々な社内制度やオフィス環境を学んだが、これらはあくまでも従業員のモチベーションを維持し、高めていくための手段であり、モチベーションをつくるためのものではないのだろう。それぞれ明確な理念をもち、それに向かったモチベーションを高くもつ者が、リンクアンドモチベーションの仲間として迎えられるのだと思った。企業が人を育てるというよりは、人が企業をつくっていき、その自分株式会社を束ねているのがリンクアンドモチベーションという組織なのだろう。

今回は伺うことはできなかったが、リンクアンドモチベーションのクライアントがコンサルティングを受けた後、どのような変化をもたらしたのか。従業員らが実感できるようなモチベーションの高まりはあったか、それによって職場の環境、組織全体の雰囲気に変化は感じられたか、その結果、解決された問題は何か、もたらされた成果は何か気になった。リンクアンドモチベーションのように、志高く共にビジョンを共有できる集団であればモチベーションの維持向上や、組織としての志気を保ちやすいだろうが、そうでない組織を抜本的に変えるのは容易ではないはずだ。どのような変革があるのか具体的な事例が気になった。

国際流通学科5年　長澤優花

自分で調査したとき、「本気」や「One for all, All for one」といったような、部活動でよく言われる言葉がキーワードになっている会社だと思った。企業調査会の他のゼミ生の報告では、事業内容だけでなくインターンシップでも「モチベーションに関わるプロジェクトをチームで成し遂げる」ということがわかり、前述したキーワードの必要性を感じた。また、「チーム」でこういったことを成し遂げるには、当然本人たちが、やる気や情熱を持っていなければならない。しかしそれを相手に伝える力も必要で、さらには相手の心を考える力も必要である。心のシワと脳のシワという表現はまさにそのものである。

実際に訪問して思ったことは、調査会で議論になったキーワードがそのままの会社であるということだ。「リンクアンドモチベーション」という会社を、別の言葉で表現しているようなお話だった。なかでも印象的だったのは「ビジネスパーソンとしてのプロフェッショナル」という言葉である。日本でサラリーマンが一番多いのに、小学生の夢の一位はサラリーマンではなく、プロのスポーツ選手が多い。これに対し染谷さんは、自分はイチローと同じレベルであり、ビジネスにおけるプロなのは同じだとおっしゃられた。だから人よりも練習（仕事）するし、成果も残したいともおっしゃられていた。星野さんも、そういったサラリーマンを元気にして、日本を元気にしたいとおっしゃられた。お二方の言葉から、

自分の職業への情熱だけでなく、モチベーションを扱うプロとしての誇りも感じられた。しかし、自分がこのように感じることができたのは、お二方の話が論理的でわかりやすかったことが大きかった。

訪問後のディスカッションでは、過去の意思決定が今の自分に繋がっていることを、改めて考えた。過去の意思決定で選んだことから逃げないこと、あきらめないことが大切なのは、未来への繋がりがあるからなのだ。逃げて、あきらめることも 1 つの選択肢であるが、私はそれを選びたくない。染谷さんがおっしゃっていたように、「1＋1＝2」ではない谷のような経験が大切だと思うし、そういった経験から、自分なりの正解を導くことで、身につくことは大きい。組織に属しているときでは、そういった人には必ずフォロアーがついてくるはずである。過去が積み重なってできた今、未来に向かってすべきことや、自分の使命について、深く考えさせられる一日であった。

国際流通学科5年　西尾七恵

リンクアンドモチベーション（以下LM）に入ってからすぐに目についたのは、会議室の入口にディスプレイされていた社長さんの書かれた本だった。それらはLMがモチベーションマネジメント会社らしく、すべてモチベーションに関する内容の本だった。それが人に見えて、手にとって読める形でおいてあることにLMが企業として顧客に訴えたいメッセージがあるのだと感じた。また、染谷さんからのお話のときでも、LMの企業概要などを話すわけではなく、モチベーション曲線を描き、自分の今までの人生を振り返るという活動をするという形でLMが行っていることや、顧客に伝えたいことを伝えられたと感じた。

また、質問時間に染谷さんと星野さんが話されたことは、私にとってとても印象深いものだった。特に、心がけていることを質問されて「逃げないこと、小さな約束でも守ること」と言われたことと、今後の人生のプランを聞かれたときに、「今の延長線だ」と言われたときには、自分の中でもどうしていきたいか、何を目標にするかが明確にあるのだと感じた。モチベーション曲線を書く活動と、この話を聞いたおかげで、私自身も、自分も常に選択していて、その延長線である今に自分がいることや、主体性を持ち、自分の目標を持つこと、そして逃げないで努力することが何より大切だという当たり前だけど大切なことを再認識できた。とても有意義で、いろいろなことを多く学べる訪問だった。この訪問で得たことは、これからの人生でもためになると思う。

国際流通学科5年　南　佳苗

まず、企業の雰囲気がいいことに驚いた。入った瞬間の空気が、自由で明るい印象を受けた。実際、働いている人々の発言が自由であることからも、制約をあまり受けずに仕事をしていることを知った。この自由さが、リンクアンドモチベーションの強みで、日本を変えていこうという思想を物語っていると感じた。また、リンクアンドモチベーションの社内には本が飾ってあったり、個室ごとに名前が付いていたりする。そこからリンクアンドモチベーションが大事にしていることを伺うことができた。それは、社員であったり、社員がもつ夢であったりする。メッセージを社員に発することで、社員が信じる指針を常に示しているのだと感じた。

リンクアンドモチベーションは学生の人気就職企業ランキングで上位を獲得している。しかし、染谷さんが語った『答えのないもののなかに答えを創っていく』というフレーズから、相対的な評価より理念を大事にする企業であると実感した。答えのないもののなかで答えを見つけていくには、自分のなかで物差しとなる基準が必要である。相対的な評価を気にしていたら、外部の環境が変わった場合、基準も変わってしまう。しかし、自分が信じる理念を持っていたら、外部環境が変わっても指針はぶれない。だから、自分のなかで信じることを見つけることは必要だと思った。リンクアンドモチベーションで質問した問いには、全て『夢、諦めない、熱意』に関連する答えが返ってきた。この一貫性こそが自分で指針を持っていることの表れだと思う。

しかし、この『夢、諦めない、熱意』に賛同できない場合はとても窮屈な環境でしかないだろう。カルトのようだと言われる所以はここにあって、リンクアンドモチベーションの掲げる夢は本気だから、常に夢を持ちつづけている人や、自分が一人になってもやり抜こうという

熱意のある人でしかないと続かないと思った。物質的な豊かさや毎日決められた作業をしている人には向かないから、自分が本当に大事にしていることと同じ企業を見極める能力が、これから重要になってくると感じた。

リンクアンドモチベーションへの訪問は、自分の夢を見つけるという点で、非常に良い経験になった。しかし、染谷さんがおっしゃった言葉と、宮重教官が常日頃言っておられる言葉がほとんどリンクしていたので、あまり新しいことを聞いた気がしなかった。

しかし、学校という場を離れ、実際の企業を見ることで、企業の印象を肌で感じることが出来たので良かった。

学生たちのレポートから、リンクアンドモチベーション本社への企業訪問において、社員の方々や会社の様子などに直接触れることによって、文献や講義からは得ることのできない暗黙知を修得できたことが示された。また、企業を働く場所という観点から理解できたことも示された。

従って、学生たちから提出されたレポートに基づいて、リンクアンドモチベーション本社への企業訪問の目的とする効果は十分に得られたことが検証された。

5. おわりに

本稿では、2009 年度卒業研究ゼミ合宿の事例から、学生たちから提出されたレポートに基づいて、ゼミ合宿の目的とする効果が得られたことを検証してきた。その結果、学生たちから提出されたレポートに基づいて、卒業研究報告会の目的とする効果も、リンクアンドモチベーション本社への企業訪問の目的とする効果も、いずれも十分に得られたことが検証された。

6. 謝辞

今回の企業訪問にあたり格別のお取り計らいを頂きました株式会社リンクアンドモチベーション　エントリーマネジメントカンパニー　マネジャーの染谷剛史様、同エントリーマネジメントカンパニーの星野大地様に厚く御礼申し上げます。

7. 引用文献

(1) Jay B. Barny, Gaining And Sustaining Competitive Advantage, Prentice Hall, 1997.（岡田正大訳『企業戦略論【上】』, ダイヤモンド社, 2003, pp.250-271.）

(2) Gary Hamel and C.K. Prahalad, Competing for Future, Harvard Business School Press, 1994.（一条和生訳『コア・コンピタンス経営』, 日本経済新聞社, 1995, p.260.）

(3) Ikujiro Nonaka and Hirotaka Takeuchi, The Knowledge-Creating Company, Oxford University Press,Inc., 1995.（梅本勝博訳『知識創造企業』, 東洋経済新報社, 1996, pp.352-355.）

(4) Peter F. Drucker, Managing in the Next Society, Griffin, 2002.（上田惇生訳『ネクスト・ソサエティ』, ダイヤモンド社, 2002, pp.178-184.）

(5) 宮重徹也『医薬品企業の経営戦略－企業倫理による企業成長と大型合併による企業成長－』, 慧文社, 2005, pp.86-121.

(6) 宮重徹也『図解雑学：医薬品業界のしくみ』, ナツメ社, 2009.

(7) 宮重徹也「2004 年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果」『富山商船高等専門学校研究集録』第 39 号, 2006, pp.47-54.

(8) 宮重徹也「研究室紹介記事－富山商船高等専門学校国際流通学科助手－宮重徹也（経営戦略）研究室」『高等専門学校の教育と研究』第 11 巻第 4 号, 2006, pp.33-43.

(9) 宮重徹也「2005 年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果」『富山商船高等専門学校研究集録』第 40 号, 2007, pp.41-48.

(10) 宮重徹也「高専3・4年生におけるキャリア教育」『高等専門学校の教育と研究』第 13 巻第 1 号, 2008, pp.35-40.

(11) 宮重徹也「2007 年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果」『富山商船高等専門学校研究集録』第 41 号, 2008, pp.57-67.

(12)宮重徹也「2008 年度卒業研究ゼミ合宿の目的と効果」『富山商船高等専門学校研究集録』第 42 号, 2009, pp.113-123.